大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？：自己エスノグラフィーの試み

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2011-01-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松田, 博幸
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003111

【論　説】

ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？

―― 自己エスノグラフィーの試み ――

松　田　博　幸
大阪府立大学人間社会学部

要　旨

本稿は、研究者が自らの体験を反省的に考察する自己エスノグラフィーを通じて、“ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？”という問いに答えようとするものである。まず、筆者自身の６つの体験が物語として示される。そして、それらの物語を通じて、①セルフヘルプ・グループにおいては、物語を重ね合わせることで浮かび上がってくる「響き」を通路として新しい体系との「出合い」が生じ、物語の固定性に裂け目が生じる、②物語に登場する人びとやことがらを置き換えることで「響き」が生じうる、という仮説が示される。以上より、ソーシャルワーカーが、ソーシャルワーカーというアイデンティティから逃れ、自らの物語の固定性に裂け目を入れ続けることが重要であることが導き出される。

キーワード：セルフヘルプ・グループ　自己エスノグラフィー　物語

１．はじめに

筆者はこれまで、ソーシャルワーカーやソーシャルワークを学ぶ学生がセルフヘルプ・グループ（以下、SHG）から何をどのようにして得ているのか、あるいは得ることができるのかといった関心を持ち続けてきた。そして、そのような関心に基づいて理論研究あるいは質的調査研究をおこなってきた（松田, 2000, 2001a, 2001b, 2001c, 2003, 2006, 2007, 2009）が、いずれの研究においても筆者自らの個人的体験が直接描かれることはほとんどなかった。しかし、それらの研究において論述あるいは解釈の拠り所となった視点は、筆者の個人的な体験を通して構築されてきたものではないかと考える。

本研究においては、SHGをめぐる筆者の物語を表すことを通して、読者が、“ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？”という問いの答えに向かうことができるようにしたい。筆者の物語に直接読者が接近可能な状況を作り出すことを通して、コミュニケーションに向けての可能性を開きたい。

２．研究方法について

宮地（2007）は、「環状島」のモデルを用いることで、トラウマ被害の「当事者」、「支援者」、「傍観者」、「加害者」、「研究者」の立ち位置を明らかにし、また、一人の人が異なる文脈によって異なる立ち位置に立ちうるとした。そしてさらに、「当事者」による研究である「当事者研究」「かくれ当事者研究」「ずらし当事者研究」

が成り立ちうるとしたが、「研究者」の立ち位置に立つのは「当事者」に限定されないだろう。つまり、「支援者」、「傍観者」、そして「加害者」が「研究者」の立ち位置に立つこともありうる。そのように考えると、研究に携わる者の立場性、そして、それに拘束される視点がどのように構築されるのかは、きわめて複雑である。このことは、「アイデンティティはもはや期限切れの概念ではないのか」（上野, 2005, p.３）といわれるような状況と無関係ではない。「研究者として」語るための拠り所となる確固たる立ち位置、首尾一貫したアイデンティティ、絶対的な知の体系を求めるのではなく、自らの視点が状況のなかでどのように構築されてきたのかを探求する必要があると考える。

そこで、「研究者」という立ち位置に縛られることなく研究をおこなう方法として筆者が用いたいのが自己エスノグラフィー（autoethnography）である。Ellis & Bochner（2000＝2006）によれば、自己エスノグラフィーは、1970年代に人類学において用いられるようになった用語であり、人類学者が自分自身を文化的レベルで研究することであると定義された。そして、社会科学において、多様な類似する用語を用いて自己エスノグラフィーが展開されてきたとされる。

筆者が本研究において自己エスノグラフィーという研究方法を用いる理由は２つある

第１に、それが「自分自身の個人的な生を重視」し、「自分の身体感覚や思考や感情に注意を払う」（Ellis & Bochner, 2000＝2006, 邦訳 p.134）ものであるからである。ソーシャルワークにおいてはクライエントの「生の過程」が重視され、それとソーシャルワーカーによる「援助の過程」とが絡まり合い共同的に展開される過程がソーシャルワークの過程であるとされる（川田, 1977）。このような「生の過程」に価値を置き、かつクライエントとソーシャルワーカーとの間で共同的に展開される過程がソーシャルワークの過程であるのなら、ソーシャルワーカー自身の「生の過程」のありようが実践の重要な焦点にされるべきであると考える。坪上（1970, 1984）においては、クライエントを変えることではなく、ワーカーが変わることに価値が置かれた。そして、坪上（1984）は、ソーシャルワーカーにとって必要な自己覚知を精神分析学的な文脈から離れて社会科学的文脈でとらえ、自己覚知における「まず親、原家族、所属集団、さらにはそれらを含む社会への、埋もれについての気づきとその深化」（p.111）を強調する。つまり、ソーシャルワーカーが、自らを社会的、ひいては政治的文脈においてとらえて自己覚知を進めることが重要であるということである。

以上はソーシャルワークのありように関するものであるが、筆者は、ソーシャルワークをめぐる研究がソーシャルワークの実践に密着したものであるためには、同様の発想が研究においても持ち込まれる必要があると考える。つまり、研究者自身が自らの「生の過程」やそれが展開されてきた社会的・政治的状況に目を向け、自らの視点や考えがどのようにして構築されてきたのかを振り返りながら研究をおこなう必要があるということである。研究者による自己覚知が必要であるともいえるだろう。そして、そのような反省的行為を含んだ研究方法が自己エスノグラフィーであると筆者は考える。Denzin（2001）は、質的調査研究をおこなう者について次のように述べており、ここからも、研究をおこなう者が自らの意識を反省的に研究することが必要であることがわかる。研究をおこなう者はすでに社会的･政治的状況に埋め込まれており、研究対象となる問題も、「客観的に」存在するのではなく、そのような社会的・政治的状況に埋め込まれた実践を通して定義されているということである。

> 質的調査研究者は、社会的世界の研究の外部やそれを超えたところに立っている客観的で政治的に中立的な観察者ではない。そうではなく、調査研究者は、研究される過程そのもののなかに歴史的そしてローカルに埋め込まれているのである。ジェンダーに規定され、歴史的に規定された自己がこのような過程に現れる。このような自己は、揺れ動く一連のアイデンティティとして、状況に埋め込まれた実践とともに

歴史を持っており、そのような実践が、研究される公の問題や個人的な問題を定義し形成している。（p.３）

もう一つの、筆者が本研究において自己エスノグラフィーを用いる理由は、「芸術と科学の狭間に自己を位置づけてみることが大事である」（Ellis & Bochner, 2000＝2006, 邦訳p.150）とされ、芸術（アート）的な手法に価値が置かれているという点である。自己エスノグラフィーにおいては、「私たちは経験をありのままに捉えられない、ということこそ真実」（邦訳p. 150）であり、経験した「事実」を正確に描くことよりも、経験についての「意味づけ」を表現することが大切であると考えられる。研究における芸術的な側面を強調する発想は、Zingaro（2007＝2008）においても述べられている。Zingaroは、周縁化された人びとが援助者として仕事をおこなう際の自己開示に関心を向け、それらの人びとを調査協力者とするインタビュー調査を計画した。そして、調査協力者の「沈黙」とどのように向き合うべきなのかという倫理的な検討を重ねた。調査者が調査協力者を暴力的に語らせ、傷つけることに対する倫理的配慮の検討である。その結果、Zingaroは、アートとしての研究という方法論的枠組みを用いることを決定した。Zingaroは以下のように述べている。長くなるが引用したい。

アートは常に、非合理的なことや言葉にされないことを表現するために用いられてきた言語である。アートは何世紀にもわたって語れなかったことへの糸口を作るために用いられてきた。現代ではアートは「本当の世界は存在しない。オリジナルは存在しない。再生産に影を投げかける元々の現実など存在しないのである。そこにあるのは解釈とその実演のみである」［Denzin（略）］というポストモダンの信念を描くものとして用いられている。（中略）ビジュアル・アーティストとして、沈黙や静けさを複雑な明暗法の“ネガの空間”や暗部として理解することは容易である。歌手としての私は、沈黙や静寂を、中断しつつ曲のリズムの基礎である“休止符”と見なせる。“アートを基盤として”語りを理解することが、私や他の人たちが持つ“その場における知識”、被害体験と力、無力さと主体性、そして沈黙と発話との間の空間における直接的な“生きた”経験を暴くのではなく、それらを表現することを助けてくれるだろう。そうすれば、私が設定した倫理的制限の中でもその成果は私が他の人たちと共有できるだろう。（邦訳 p.112）

客観的な現実が存在すると考えること、絶対的に「正しい」知の体系が存在すると考えることから解放されて語りを解釈するという、きわめてインタラクティヴな行為に価値を置いて研究をおこなう際に、芸術（アート）の手法を用いることは重要である。たとえば、演奏、絵画の制作、演劇、すべてインタラクティヴな行為であり、そのような行為を通して言葉が生み出されてきた。本研究においても、まずSHGをめぐる筆者の物語を示し、物語の間に生じる響きのなかから立ち現れてくるアイディアを形にしたい。

そして、筆者はここで、自らの人生におけるエピファニー（epiphany）に焦点を当てて物語を示したい。Denzin（2001）によれば、エピファニーとは、「個人の特質を照らし出し、しばしば個人の人生における転換点を表す問題的体験の瞬間」（p.158）であるとされる。筆者が自らの体験を振り返り、エピファニー、つまり、人生における転機となった体験のなかでSHGに関わりがあると考えている体験、あるいはSHGとの関わりにおいて転機となったと考えている体験を物語として示したい。そして、その後、物語の解釈を通して、“ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？”という問いの答えに向かいたい。

これから示される物語は本稿執筆時（2009年９月）における物語であり、もちろん、今後、物語が変化する可能性はある。物語から抜け落ちている部分から新たな物語が生まれることもあるだろうし、プロットが変化することもあるだろう。また、書かれたものが不特定多数の読者の目に触れうることを考えると語ることので

きないこともある。それに、そもそも紙幅の制約もある。つまり、ここで表される物語はけっして時間を超えた不変性を持っているわけではないし、物語において表されない体験は多くある。しかし、そのようなことは芸術作品においてはきわめて当然のことであろう。

筆者がこのような自己エスノグラフィーという方法を用いた理由は、とどのつまり、筆者の人生が一度きりのものであるということ、つまり、人生の一回性に求めることができる。筆者は、いつかはかならずこの世を去る者として、representation（再現／代表）よりも、たえず形を変えながらどこまでも続く対話を求めたかった。

３．筆者の物語

以下、SHGをめぐるエピファニーであると筆者が考えるところの複数の物語を示す。なお、主語を「私」としたほうが語りやすいため、そのようにする。

＜物語Ｉ＞

私は、大学（社会福祉学部）を卒業したあと、ある市の福祉事務所にて生活保護のケースワーカーとして勤務するようになった（1985年）。配属された福祉事務所において、大学で社会福祉を学んだ職員は、筆者１人であった。在職中に、精神科ソーシャルワーカーとしての道を考えるようになり、４年勤務した後、退職した。他の市の福祉事務所で非常勤の生活保護ケースワーカーとして２か月勤務した後、精神科病院において非常勤のソーシャルワーカーとして勤務するようになった（10か月）。そして、ある自治体の保健所の精神保健相談員（現、精神保健福祉相談員）として採用される。しかし、職場における人間関係および仕事になじむことができず、精神的にまいってしまった。帰宅しては泣き、勤務中にも涙が止まらなくなるような状況であった。精神障害を持つ人の話を聴きながら、“あなたはいいよな。こうやって話を聴いてくれる人がいるんだから…”と感じたこともあった。結局、２ヶ月弱で仕事を辞める。辞める前に、何度か、以前勤めていた精神科病院の臨床心理士のPさんからサポートを受ける。正式なカウンセリングのセッションではなく、帰宅途中に喫茶店で話をするというようなものであった。Pさんと話をするなかで、社会福祉の現場ではなく、大学院への進学という方向を決める。私は、Pさんが私に将来の目標を持たずに仕事を辞めるという事態を避けさせようと意図しているように感じ、かすかな違和感を持った。しかし、そういったことよりも、Pさんが自分の話にていねいに耳を傾けてくれるのがうれしかったし、信頼感を持った。

その後、自宅に短期間（記憶が定かではないが、数週間程度か？）、引きこもった。ドアを開けず、外に出ることはなく、自分を責め続けていた。しかし、世界の中心が自分の外にあり、自分が世界の片隅にいるような感覚ではなく、世界の中心が自分の身体のなかにあるような感覚をすこし持つようになり、すこし家の外に出るようになった。それは、自分を測る物差しは自分の外にあるのではなく、自分の身体の内側にあるという感覚であった。

家の外に出ると、仕事をしている人たちがやたらと気になった。大学院に進学するということをいったん決めたが、社会福祉とはまったく関係のないこと、たとえば、工芸の世界に進むことを考え出す。しかし、以下のように考えが展開した。

- ソーシャルワーカーなどという職業は、強い人がなればよい。社会のことや人間の生活のことを語るのは、そういった強い人が語ればよい。自分のような弱い人間はそういったことを語る資格はない。
- しかし、本当にそうなのだろうか。ソーシャルワークが人間の生活に価値を置くのであれば、立派な生活には程遠いが兎にも角にも生活をしている自分でも、社会のことや人間の生活のことを語ってもかま

わないのではないだろうか。生活をしている（＝生きている）ということが、ある人が社会や生活について語る際の唯一の資格なのではないだろうか。

・どうやって社会を変革するのかという視点だけでなく、それに加えて、ある人の人生がその人自身にとってどのような意味をもつのかという視点も取り入れてソーシャルワークを考えることはできないだろうか。

このように考え、大学院で社会福祉を学ぶという決心を固め、大学院に進学する。当初は、以上の考えに基づいた漠然とした関心を持っていたが、研究テーマをより具体的にするなかで、かつて精神科病院で仕事をしている時に出会ったSHGを思い出し、SHGを研究の対象とすることにした。しかし、大学院では、周囲の人たちに自分自身の挫折体験を話すことはほとんどなかった。

＜物語Ⅱ＞

大学院に進学後、ある研究会でSHGに関する洋書の内容を報告したところ（1992年10月）、その場に出席していた他大学の教員Qさんから、SHGに関連する集まりがあると聞き、参加してみないかと誘われた。教えてもらった場所に行くと、いくつかのSHGのメンバー、ソーシャルワーカー、研究者が全部で６～７人、集まっていた。精神科病院に勤務していたときに一度だけ出会った、AA（アルコホーリクス・アノニマス）のRさんが出席しており、出会ったときのことを話すと覚えていた様子だった。Qさんと、Rさん以外は全く面識のない人たちだった。最初は、その人たちが何をしようとしているのかわからなかったが、そのうち、その人たちが、SHGの活動を支援する活動の準備を続けてきたこと、しかしながら、活動を継続するのか、中止するのかといった話し合いがおこなわれていることがわかった。話し合いのなかで“ここまでやってきたのだからやりましょうよ”という意見が出され、結局、活動を続けることになった。そして、私もその活動に参加することにした。

かつてそのグループは大阪府内のSHGの実態調査をおこなっており、そのときに収集した情報を整理することになったが、私が整理票の様式づくりを担当することになった。当時はパソコンが一般に普及し始めた頃であり、私はパソコンを持っていなかったが、大学のパソコンを使い、作業をおこなった。その程度のことでも、私は自分が役に立っているという感覚を持つことができた。やがて、SHGの情報を電話で提供する活動を始めること、場所は「大阪ボランティア協会」の一角を借りること、団体の名前は「大阪セルフヘルプ支援センター」とすることが決まった。しかし、事務的な準備作業をおこなうための集まりを開いてもなかなか人が集まらず、雑談だけで時間を過ごすこともあった。しかし、その後、集中的に作業が進められ、1993年５月８日に正式発足を記念する講演会を開催し、１週間後の５月15日から、電話による、SHGの情報提供を開始した。２～３人で毎週土曜日の午後、電話当番を担当することになった。新聞やテレビで活動が取り上げられた後は電話が続けてかかってきたが、しばらくすると電話がほとんどかかってこなくなった。そんなとき、私は当番の相手と雑談をしていたが、SHGのメンバーとペアになったときは、SHGの活動の様子を興味深く聴くことができた。

電話による情報提供に加えて、毎月１回、定期的に月例会を開催することになった。月例会には、さまざまなSHGのメンバー、ソーシャルワーカーや保健師、研究者が参加していた。多い時で20人近くの参加があった。土曜日の夜、３時間ほどの集まりであったが、センターを運営するための事務的な話し合いが終わった後、あるいはそれがない時は、参加者が自らの個人的な体験を語ったり、自らが参加するSHGの活動の様子や課題を話したり、情報交換をおこなったりしていた。出席は強制されず、テーマが設定されることもなく、記録も取られなかった。出席者の名簿も作られなかった。センター発足当初、月例会参加者のうち、SHGのメンバーは３分の１程度であったが、次第にSHGメンバーの数は増えていった。アルコール依存症、難病を含む疾病、病

気や障害を持つ子どもの親、中卒・高校中退の子どもの親、吃音、セクシュアル・マイノリティ、精神障害など、さまざまなことがらをめぐるSHGのメンバーが参加していた。私は、それらの人びとから語られる物語、とりわけ、自分の価値観が揺るがされるような話（たとえば、吃音のSHGのメンバーによる“どもっていてもかまわない”という話、中卒・高校中退の子どもの親のSHGのメンバーによる“学校に行かなくてもかまわない”という話など）に惹きつけられた。また、個人的な体験やSHGの課題が語られる際にSHGを超えてそれらの人びとの間で生じる共感にも惹きつけられた。

＜物語Ⅲ＞

大学院に在学中に専門学校で非常勤講師のアルバイトをするようになった（1994年）。１週間に１日、２クラスを１コマ(90分)ずつ担当するというものであったが、２週目の授業から学級崩壊を体験することになった。生徒たちは騒ぎ、歩きまわった。ヘッドフォンをつけてマンガを読みふける生徒もいた。私は大声を出してそのような状況を鎮めようとしたが、効果はなかった。２クラスともほぼ同じような状況であった。２週目の授業を終え、帰宅途中の駅のホームに呆然と立ち、はたして自分はこの先やっていけるのかと感じていた。それ以降、毎週、同じような体験を繰り返すことになった。

やがて、教室での体験がたえずよみがえってくるようになり、生徒を傷つけることを空想し始めたり、目立って態度の悪い生徒と同じような服装をしている人を街中で見かけると緊張が走ったりした。また、自分が以前同級生からいじめを受けていた時の感覚が教室のなかで激しく蘇ってきた。このような体験が続くなか、私は疲れ果て、心療内科を受診すること、SHGに行くこと、という２つの選択肢を考えた。そして、私は後者を選んだ。“とにかくしんどい。そこにいけばなんとかなるかもしれない”と思い、参加することにした。

私が参加することにしたSHG「α」は、メンタルヘルス上の問題を持つ人たちのSHGであったが、医師の診断を受けているかどうか、医学的治療を受けているかどうか、といったことは一切関係なく、自分自身がメンタルヘルス上の問題を持っていると考えれば参加できるSHGであった。「大阪セルフヘルプ支援センター」の活動に参加している、あるSHGのメンバーが情報提供してくれたSHGであり、毎週１回、決められた曜日の夜に、体験を語りあい、聴きあう集まりが開かれていた。

私が会場に行くと、５～６人の人たちが来ており、雑談をしていた。開始時間が来ると、グループのなかで共有されている冊子を回し読みし、その後、それぞれの参加者が自分のことを語る時間となった。他の参加者の語りを聴いていると、自分とは違うと感じたり、よくわからないと感じる部分が多くあったが、自分と同じだと感じる部分もあった。

その集まりのなかで、参加者Ｓさんの語りが私に大きな影響を与えた。Ｓさんは、あることを目の前にして大きな不安を抱えており、自分がどのように不安なのかを語ったが、Ｓさんの物語が自分の物語と重なった。そして、Ｓさんは、自分がそういった状態にあるにもかかわらずどのようにしてある一日をとても楽しく過ごすことができたのかを具体的に語った。私はＳさんの物語を聴きながら、“ここに来つづければ、Ｓさんのようになれるかもしれない”と感じた。真っ暗な海のなかに放り出されてもがいていたときに、遠くに灯りを見出したような気分になった。

そして、私は、そのSHGに通い続け、少しずつ自分の話をするようになっていった。専門学校で学級崩壊を体験しているという話だけでなく、職場に馴染むことができず仕事を辞めてしまったことや、学校でいじめられていたことを話すようになった。また、それまで誰にも話したことのなかった自分のセクシュアリティについて、少しだけではあるが話すようになった。また、ある体験を話しながら大泣きすることもあったが、誰も遮らずに泣き続けることができたのがありがたかった。

そのような体験を通して、“自分はダメな人間である”という感覚が滑り落ちていったような感じがした。また、“人は強くなければならない”という感覚からも解放されるようになった。

＜物語Ⅳ＞

SHGでは、他のメンバーから語られる物語と自分自身の物語とを重ね合わせるという聴き方を自然とするようになっていった。あるとき、他のメンバーの話を聴きながら、“なぜこの人はそのような行動をとったのだろう”と考え始めた。すると、ある種の苦しさを感じた。他の人の物語を分析しても自分自身が楽になることはないだろうと感じた。

他のメンバーの物語と自分自身の物語とを重ね合わせても、重なる部分はないと感じることは多々あった。しかしながら、一方で、よく聴くとある部分は重なると感じたリ、また、物語に登場する人びとやことがらを他のものに置き換えれば自分の物語と重なると感じることがあり、話の聴き方によって感じ方は異なるのだと考えるようになった。

＜物語Ⅴ＞

あるとき、SHGの集まりで、他のメンバーから、“あんた、どこが悪いんや”と言われた。その人は私から見て大変だと感じる体験を持っており、私は、その言葉を、“ここはあなたのような、問題の軽い人が来るようなところではない”というメッセージだと感じた。すると、SHGのなかで語られる他のメンバーたちの物語と自分の物語とを比較するようになり、“やはり自分のような、問題の軽い人が来るようなところではない”と苦しむようになっていった。

しかし、やがて、自分が「参加資格」にとらわれていたのではないかと考えるようになった。“自分にとって、参加することがプラスになっているのか、マイナスになっているのか、それだけを考えればよいではないか。少しでもプラスになっているのであれば参加しつづければよいし、マイナスになっているのであれば参加するのを止めればよい。ただそれだけのことだ”と考えるようになった。そして、それまでの体験を振り返り、参加し続けようと感じた。それ以来、苦しまずに参加できるようになった。そのSHGには、“メンバーであるかどうかを決めるのは自分自身である”というルールがあり、このルールが、そのような考えを支えてくれた。

＜物語Ⅵ＞

「大阪セルフヘルプ支援センター」の活動を通してセクシュアル・マイノリティの人びと関わるようになったこと、そして、SHGのなかで自分の弱い部分をさらけ出し、感情を表すことで、私は、「男らしさ」にとらわれる必要がないのだと感じるようになっていった。

また、ある場で、ゲイのＴさんが自分の物語を語るのを聴いた。そのとき、私は、Ｔさんの物語のある部分が自分の物語のある部分と深く重なり合うのを感じた。それ以来、私は、自分のセクシュアリティを、セクシュアル・マイノリティという観点からとらえ直すようになった。私は、それまで、自分のセクシュアリティが“変だ”、“異常だ”、“普通ではない”となんとなく感じ続けていた。はっきりとは言語化されることのなかった感覚を持ち続けていた。そして、そのことを社会的な規範との関係において考えることはなかった。しかし、Ｔさんの物語にふれてから、自分のセクシュアリティ、とりわけ、性的指向の対象や性欲の充足方法が、社会の支配的なヒエラルキーの下の方に置かれており、そして、自分がこれまでなんとなく感じ続けてきた苦しさは、そのような社会的な状況を通して生み出されていたのだと考えるようになった。

一方で、自分の持つアディクションの問題が「底をついた」。生活が大きく崩れるところまではいかなかっ

たが、自分の手に負えなくなった。

そして、セクシュアリティとアディクションに関する２つのSHG、「β」と「γ」に参加するようになった。いずれのSHGにおいても、それまで人に話すことがなかった物語を語った。現在に至るまで参加を続けている。

「β」と「γ」においては、「α」で自分が体験したのと同じように、物語が重なり合わないと感じることは多々ある。メンバーのセクシュアリティが社会的な規範から外れるという点では共通していても、それぞれの人のセクシュアリティのありようはさまざまであるし、アディクションのかたちもさまざまである。また、物語をわかちあう場においても、セクシュアリティやアディクションのかたちをめぐるヒエラルキーが形成されていることを感じることもある。しかし、一方で、それぞれの人がとらわれているカテゴリーを溶解させ、つながりを見出そうとする営みが展開されているのも感じる。たとえば、私のセクシュアリティは、どちらのSHGにおいても「珍しい」ものであるようだ。“そういったことは初めて聞いた”と言われたり、説明しても腑に落ちないような表情をされることがある。しかし、それでも、私の物語に耳を傾けてくれた上である部分に焦点をあてて接点を見出し、その部分をめぐる、よく似た、自分の物語を語ってくれることは多くある。

４．考察

以上が筆者自身の物語であるが、これらの物語から浮かび上がってくるのは、ソーシャルワーカーというアイデンティティを持つことができなくなった筆者が、SHGの人びとと物語を重ね合わせながら、たえず自らの立ち位置をずらし、社会的に求められる役割をすり抜け続けてきた過程である。

佐藤（2008）は、SHGのメンバーが他のメンバーの語りを聴くことから生じる自分自身に対する効果は、物語の固定性に裂け目を生じさせることであるとする。筆者の考える、立ち位置をずらして社会的に求められる役割をすり抜ける過程を物語論の文脈で考える際に重要な見解である。佐藤は以下のように述べる。

> 「聴く」ことの対自的効果は、ピアの声を「聴く」ことによって、定着した自己の物語を語ることを一時停止し、（中略）定着した物語の固定性に裂け目を生じさせ、物語を持続的に語り直していく生成への端緒を拓くような内省を活性化する点にあると考えられる。（p.52）

そして、物語の固定性に裂け目が生じるのは、聴くことによって多声性が再発見され、物語の焦点がずれるからであるとされる。

> 定着した物語の固定性に裂け目を生じさせる内省とは、「聴く」ことによる多声性の再発見によって、定着した物語とは違和的な要素へ焦点をずらし、そうした要素と定着した物語との間に、いわば物語の複数性を設けることで、定着した物語の支配性を一定程度低減させる作用を意味するといえよう。（p.53）

このような佐藤の見解は、筆者の物語とも響きあう。SHG「α」においてＳさんの語りを聴くことで、“自分には楽しく過ごせる日などない”という筆者の物語の固定性に裂け目が生じたと考えられる。また、「大阪セルフヘルプ支援センター」でSHGの人たちの話を聴くことを通して、たとえば、“どもることはよくないことだ”“学校は行かないといけないものだ”“SHGを超えて人びとがわかちあうことはできない”という物語の固定性に裂け目が生じた。さらに、SHGという場ではなかったが、SHGのメンバーの語りを聴くときと同じような話の聴き方でＴさんの語りを聴いた際に、“自分のセクシュアリティは変だ、異常だ、普通ではない”という物語の固定性に裂け目が生じたといえる。そもそも、筆者は、３つのSHGにおいて他のメンバーの語りを

聴くことで、あるいは、その他の場でSHGのメンバーの語りを聴くことで、多くの「気づき」を得たが、それらの「気づき」は、異質な物語との「出合い」を通して物語の固定性に裂け目が生じることで誕生した、新しい物語の萌芽だと考えることができる。

かつて「大阪セルフヘルプ支援センター」では合宿が開かれ、さまざまなSHGのメンバー、専門職者、研究者などが、夜遅くまで、SHGとは何なのかといった話題で語り合っていた。そのなかで、あるSHGのメンバーが、“SHGというのは、参加している人の価値観を変えるのではなくて、価値観を広げるのだと思う”と発言し、他のSHGのメンバーの共感を得た。古い価値観が消えてしまうのではなく、新しい価値観が付け加わるのだということであった。このことは、佐藤のいうところの「物語の複数性を設けること」や「定着した物語の支配性を一定程度低減させる作用」（傍線は松田による）に重なり合うだろう。けっして古い物語が消えてしまうのではなく、あくまでも支配性が低減し、物語が並立するということである。

そして、筆者は、他の人の物語と自分の物語を重ね合わせることで浮かび上がってくる「響き」を通路として新しい体系との「出合い」が生じ、物語の固定性に裂け目が生じるのだと考える。物語の部分的な重なりから生じる共感をここでは「響き」と呼びたい。筆者の場合、Ｔさんの物語のある部分を聴いて「響き」が生まれ、それを通して、セクシュアル・マイノリティの物語に「出合い」、自らの物語の固定性に裂け目が生じたと考えられる。SHGをめぐる議論において、同じような体験をした人たち同士の間で生じる共感についてよく言及されるが、このように考えると、共感というのは、けっして、両者がまったく同じ物語を生きていることの確認としての意味を持つのではなく、異質な物語との「出合い」のきっかけを提供するという意味を持つのだといえるだろう。このことは、音楽において、転調が起こる際にある和音が、異なる２つの調の間で共有され、推移的な役割を担うことがあることを考えると理解しやすいだろう。ある調から推移的な和音を経由して異なる調への転調がおこなわれるという状況である。

この場合、気をつけないといけないのは、他の人の物語に登場する人びとやことがらを置き換えてみることによって「響き」が生じうるということである。たとえば、筆者はアディクションを持っているが、アルコールに対する依存はない。しかしながら、アルコール依存症の人の物語を聴く際に、「アルコール」の部分を自分のアディクションの対象に置き換えると「響き」が生じる。筆者が初めてＳさんの物語を聴いたとき、Ｓさんが不安を感じている対象と筆者が不安を感じている対象とは異なったが、筆者が対象を置き換えることで「響き」が生じ、そこから、筆者にとって異質なＳさんの物語との「出合い」が生まれ、筆者の物語の固定性に裂け目が生じたと考えられる。また、Ｔさんの物語のなかで筆者が感じた「響き」も、ここでいうところの置き換えを通して生じたものである。Ｔさんは自らのマスターベーションについて語ったが、Ｔさんがその際に欲求の対象としたものと、筆者が対象とするものとは異なっていた。しかし、それらを置きかえると、強い「響き」が生じた。音楽に倍音という概念がある。ある一つの音（たとえばドの音）を鳴らした際に、よく聴くと、複数の他の音（たとえばソの音やミの音）がかすかに鳴っているのが聴こえる。そのように一つの音に含まれる他の音が倍音である。一見すると、自分の物語と接点を持たないような物語であっても、よく聴き、物語の構成要素を置きかえることで、１つの物語の「倍音」にあたる物語に気づき、「響き」が生じることがある。

５．ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？

最後に、“ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？”という問いに戻りたい。

筆者は、この問いに答えるには、“ソーシャルワーカーが実践を展開する際にソーシャルワーカーというアイデンティティは本当に必要なのだろうか？”という根本的な問いを経由する必要があると考える。ソーシャ

ルワーカーの社会的地位の向上を目指す運動において、戦略的な観点から確固たるアイデンティティが必要とされることはあるだろう。また、機関において、他職種に対抗するために、あるいは、ソーシャルワーカーの政治的地位を向上させるために、それが必要とされることもあるだろう。しかしながら、クライエントと向き合う際にも、それは必要なのだろうか。ソーシャルワーカーが、ソーシャルワーカーというアイデンティティから逃れ、自らの物語の固有性に裂け目を入れ続けることが大切なのではないだろうか。そして、そのために、ソーシャルワーカーは、SHGの人びとが特定のアイデンティティから逃げ続け、物語の固有性に裂け目を入れ続ける際の「したたかさ」と「しなやかさ」を学ぶ必要があるのではないだろうか。

ソーシャルワーカーは、自らの実践を、専門性の追究の名のもとに、閉じた体系に押し込めてしまうのではなく、自分たちの実践の外で展開されている営みに対して開き、それとつながる必要がある。ただし、その際に、異質なもの（ここではSHGの文化）をコントロールしたり、同化しようとするのではなく、異質なものに対して、それを異質なものとして向き合い続け、異質なものから学び続け、そして、変化し続けることが大切なのではないだろうか。

６．おわりに

正直なところ、本稿においては、“ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？”という問いに対する直接的な答えはほとんど示すことができなかったように思う。しかしながら、一方で、その問いに答えるための素材は、筆者の物語を通してかなり豊富に提供できたのではないかと思う。本稿を通して、読者による自分自身との対話を含めて、何らかの対話が生まれれば、とてもうれしく思う。

参考文献

Denzin, Norman（2001）. *Interpretive interactionism*（２nd ed.）. Thousand Oaks, CA: Sage.

Ellis, Carolyn and Arthur Bochner（2000）. Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Researcher as Subject. In Norman Denzin and Yvonna Lincoln（Eds.）, *Handbook of qualitative research*（２nd ed.）（pp.733-768）Thousand Oaks, CA: Sage.（＝2006, 藤原 顕 訳「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」平山満義 監訳『質的研究ハンドブック３巻：質的研究資料の収集と解釈』[pp.129-164] 北大路書房）

川田誉音（1977）「ソーシャルワーク過程：＜生の過程＞と＜援助の過程＞」『四国学院大学論集』第39号 95-118.

松田博幸（2000）「セルフヘルプ・グループと『ともに』学ぶこと：専門職支配からの脱却」伊藤克彦・川田誉音・水野信義 編著『心の障害と精神保健福祉』（pp.97-110）ミネルヴァ書房

松田博幸（2001a）「援助専門職者が育てられる場としてのセルフヘルプ・グループ」『月刊福祉』第84巻第３号 10-13

松田博幸（2001b）「『当事者』の語りを中心とする授業に関する考察：セルフヘルプ・グループのメンバーと『ともに』学ぶ過程」『社会問題研究』第51巻（１・２合併号）343-381

松田博幸（2001c）「社会福祉領域における援助専門職の専門性とは？」『AIGO』第48巻第６号 36-39

松田博幸（2003）「援助システムの周縁部における実践の教育上の意義：セルフヘルプ・グループの活動の場に参加した学生へのインタビューの分析より」『社会問題研究』第52巻第２号 175-216

松田博幸（2006）「セルフヘルプ・グループの文化が援助専門職者に与える影響：あるリカバリング・ソーシャル・ワーカーからのインタビューより」『社会問題研究』第55巻第２号 65-101

松田博幸（2007）「セルフヘルプ・グループがソーシャル・ワーカーのアイデンティティに及ぼす影響：あるソーシャル・ワーカーからのインタビューより」『社会問題研究』第57巻第１号 １-33

松田博幸（2009）「セルフヘルプ・グループをめぐる『越境』：当事者同士の『つながり』の技法」『ソーシャルワーク研究』第34巻第４号 31-39

宮地尚子（2007）『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房

佐藤　恵（2008）「起点としての『聴く』こと：犯罪被害者のセルフヘルプ・グループにおけるある回復の形」崎山治男・伊藤智樹・佐藤 恵・三井さよ 編著『＜支援＞の社会学：現場に向き合う思考』（pp.40-61）青弓社

坪上 宏（1970）「社会福祉援助活動とはなにか：ケースワーク論の再検討より試論へ」『精神医学ソーシャルワーク』第５巻第１号 ２-12

坪上 宏（1984）「援助関係論」仲村 優一・小松 源助 編『講座 社会福祉５社会福祉実践の方法と技術』（pp.80-117）有斐閣

上野千鶴子（2005）「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子 編『脱アイデンティティ』（pp.１-41）勁草書房

Zingaro, Linde（2007）. *Rhetorical identities: Contexts and consequences of self-disclosure for 'bordered' empowerment practitioners.*（＝2008, 鈴木 文・麻鳥澄江 訳『援助者の思想：境界の地に生き、権威に対抗する』御茶の水書房）

What can social workers get from self-help groups?: An autoethnographical approach.

Hiroyuki Matsuda
Osaka Prefecture University

Abstract

This article focuses on what social workers can get from self-help groups, by taking an autoethnographical approach that explores researcher's experiences of life. The author portrays autobiographical narratives on self-help groups. The six narratives were portrayed by the author and underlying processes were explored. The author found that the dominant stories were cracked through the process which includes the two stages: (1) the resonance with the partial similarity in others' stories, and (2) the encounter with the differences in them. The resonance guides a person to the different story and then a crack is brought in the dominant story. It is crucial that social workers try to free themselves from the dominant identity of 'social worker' by learning how to continue to crack dominant stories they have. They can learn it from self-help groups.

Key words: self-help group, autoethnography, narrative